

2022年度 男女共同参画センターはあもにい
第2回運営審議会 議事録

1. 2023年2月6日(月)10:00～12:00
2. 熊本市男女共同参画センターはあもにい 4F 会議室
3. 出席者
 - ◆ 運営審議委員(10名 五十音順)
井手志保委員 小野由起子委員 北村真理子委員 坂口京子委員 阪本恵子委員
那須円委員 本田恵介委員 松本充右委員 宮村飛伸委員 八幡彩子委員
 - ◆ オブザーバー
熊本市文化市民局人権推進部男女共同参画課 課長 山田紀枝
 - ◆ 事務局
 - ・代表企業A 尾池千佳子(九州総合サービス株式会社 代表取締役)
欠席:太田勇雄(九州総合サービス株式会社 取締役部長)
 - ・構成企業B 松内隆典(熊本産業文化振興株式会社 常務取締役)
河野正治(熊本産業文化振興株式会社 総務部長)
 - ・構成企業C 藤井宥貴子(有限会社ミューズプランニング 代表取締役)
館長:吉田稀世
副館長:田中誠一
舞台事業課:課長 安藤陽介
維持管理課:課長 寺本祐矢
企画事業課:課長代理 田中美帆、山口美和、宮脇利允
総務管理課:係長 大久保章、島浦萌
4. 会次第及び議事内容
 - (1) 代表あいさつ(はあもにい管理運営共同企業体代表 尾池千佳子)
 - (2) 館長あいさつ
 - (3) 審議会委員および出席者紹介
 - (4) 審議
 - 議題1 はあもにい管理運営状況について
 - ・会館運営状況報告
 - ・質疑応答

議題2 令和4年度実施事業について

議題3 令和5年度事業方針、事業計画について

・質疑応答

5. 特記事項

- ・議事録の署名に関しては、北村委員、坂口委員が推薦され、審議会承認となった。
- ・運営審議会事前資料 P3～P4 差し替え

6. 議事録

議事進行:八幡委員

● 議題1 質疑応答・審議

(本田委員)

利用状況のことですが、来館者数推移で、昨年度から実数が減っているのに、前年比が増えているのはなぜでしょうか？

(田中副館長)

今年度は4月から12月までの実数で、昨年度の同じ期間と比べています。

(本田委員)

はあもにしも加盟している全国公立文化施設協会のコロナの感染拡大予防ラインが1月4日付で改定されています。新しいガイドラインによれば、アクリル板の設置も必ずしもしなくてよいと、また、検温は各自で事前に済ませることでよいという判断になっています。利用者にとって負担になっていたコロナ対策が徐々に緩和されるのであれば、そのことを利用者に説明されて、それが利用率の向上につながっていくのではないかと思います。

(那須委員)

来館者数については、R4年度の活動はリモートによるものが多いですが、リモート参加者も来館者数に反映されているのでしょうか？ もう一点、情報資料室の利用者数に関してですが、LGBTQ や老々介護などといった社会的関心の広がりに応えるための図書購入費は、維持されていますか？

(田中副館長)

オンラインの利用者は、1月末までで1015人です。来館者には含めておりません。情報室の書籍購入費は例年通り予算を確保しています。男女共同参画をテーマにしたものも購入しています。

● 議題2 感想

(北村委員)

第一幼稚園の〈父子でミニアルバム作り〉で、はあもにいと連携させていただきましたので、お礼を兼ねて報告します。この数年、コロナ禍において親子が一緒にするイベントがなかなかできないという話をしたところ、はあもにいから連携をご提案いただきました。当日、30組が参加。子どもにとって、お父さんお母さんと楽しいことがあったという思い出が心の財産になって、今後なにかあったときに一歩踏み出す力になると思いますし、お父さん同士のコミュニケーションも、これから小学校、中学校につながっていく、とても大事なものだと思います。たいへん貴重な機会をいただきました。ありがとうございます。

● 議題3 質疑応答・審議

(坂口委員)

防災講座は、支援者に向けてやっているのが、とても良いと思います。DV講座は、対象を中3にしたのが素敵だと思っていて、難しい年齢だからこそ、なかなか(伝えたいことが)届かない年齢なので、このプログラムはずっと続けていただきたいと思っています。メンズカレッジが(参加者を集めるのが)大変だということですが、たとえば名称を「地域大学(コミュニティ・カレッジ)」にして、教職員対象に募集してみるとか、大学生の男子を対象にしてみるとか、もう少し視野を広げてみるというのではないのでしょうか。(ウイメンズカレッジをはじめとする講座の)受講生に若年層が増えているというのはとてもいいことで、いまの若い人たちはとても意識が高く、SDGsもジェンダーも個人情報も、いろんなことをよく勉強していますが、学校以外で大人と話す機会がありません。そういうところをはあもにいが引き受けられると、熊本の未来が変わっていく力になるのではないのでしょうか。こんど「絵本とジェンダー」という講座があるようですが、これをきっかけに「よんでよんでのかい」で取り上げる本が変わっていくのかなと思いました。通常の子育て支援の本ではなく、はあもにい独自の本の選択になれば、面白いんじゃないかと思います。次期のウイメンズカレッジが(地域リーダーとビジネスリーダーの)選択制になっているのは、すごいなと思います。(講座に参加できなかった人への)限定配信やフォローアップ、選択制などの工夫をされているのが素敵だなと思っています。幼稚園と一緒に実施されたという話がありましたが、それは一つの視点かなと思います。自主講座で参加者を集めるのはたいへんですから、大学、幼稚園、小中学校など公的機関とタイアップして、集客はそこに任せて、(はあもにいの事業を)もっと広く深く浸透させるために互いに協力していく。特に、幼稚園との協力は、その年代の子どもの視点やお父さんお母さんの価値観に与える影響、悩みもあるでしょうから、ほんとにいいなと思いました。工作などソフトな切り口で、さりげなく男女共同参画について含んでいただけるといいと思います。単発講座と3回(連続)講座がありますが、単発講座についてフォローアップを行っていただけると、たんに単発に終わらないものになるのかなと。フォローアップ講座を今後検討していただくといいかなと思いました。

(宮村委員)

こちらに来る前に「男女共同参画」をネット検索しましたが、そうとう批判が多いです。私はここに関わらせていただいて、みなさんの活動をすごいなと思って、有意義なものと思っていますけれども、ツイッターで見えますと、「国の予算を9兆円も使って、もうやめろ」とか「無駄だ」という意見がいま多いので、皆さんの活動はすごく見られていると思います。批判の内容は、「意味があるのか？」というものと、男女のバランスについてですね。女性の社会進出、キャリアアップの底上げは意味があると思いますけど、(男女共同参画事業を)見ている人は、バランスをすごく見ています。私、これまで冗談半分で言ってきましたけど、メンズカレッジの方が内容が薄いのではないかと、これ、ほんとうに見られています。バランスがあまりに悪いと、ツイッターで拡散して、バズって、一気にニュースになる可能性もありますし、予算を(どう)使っているのかということも見られていますので、ここは気を引き締めていかないといけないと思ったところです。バランスについては、私がいつも言っていることですが、こういう活動では男性の比率が落ちてしまうので、バランス、予算(配分)、表記、内容などに気を配って発信された方が良いかなと思うのがひとつと、もうひとつは、メンズカレッジについてですね。私は民間企業の代表としてここに来ていると思っています。土日開催、平日は2時から開催とか、参加できるものがほぼないんですよ。企業のなかでは、私のようにサービス業で土日は仕事、月火が休みという人が多いと思いますので、対象から外れてしまっています。われわれも参加できるように、内容、時間に配慮してもらえればなと思っています。で、ひとつ案があるんですけど私、バスケットが好きで、だいたい夜の7時半から9時半まで体育館を借りて練習しています。人はいっぱい集まっていますから、(はあもにいの講座は)その時間帯の開催はないですけど、集まるかどうかは分かりませんが、その時間だと仕事が終わってサッカーやバスケットをしている人はいますから、参加者層として狙ってもいいのかなと思っています。メンズカレッジは私も期待していますので、そのあたりを考慮してもらえればと思います。私もタイミングが合えば、参加したいと思っています。

(松本委員)

メンズカレッジの話が出ていますが、私が見るところ、若者に関してはジェンダーに関する意識は高くなっていると思います。本学でも、メジャーとマイナー、専攻と別に副専攻を作ろうと考えて、学生たちにアンケート調査を実施しました。これから何を学びたいか、というアンケートをとると、ジェンダーを学びたいという学生が非常に多かったです。ジェンダーと英語コミュニケーションをやりたいと。ですから、若者は、かなり意識は変容していると思うんですが、問題は、おじさんたちの意識が昔ながらで変わってない。われわれおじさんたち世代の、ZじゃなくてA世代かな、B世代かな、分かりませんが、意識を改革するのが大事かなと思います。そこで、改めて(はあもにいの、メンズ)カレッジに来て学ぼうというのも、ハードルが高いような気がします。で、大学でも取り組んでいるんですが、オンデマンド配信として、内容を録画して、それを後日、時間があつたら見てください、ということもできると思うんですよ。今日、(先ほどの館からの報告に)欠席した受講者のために、録画したものをYouTubeで限定配信するという話がありましたが、オンデマンド

で、時間があるときにご覧下さいと、ハードルを下げたやっていくと、年配の人たちにも関心を持ってもらえるかなと思ったので、オンデマンドを検討されてはどうかと思いました。

(井手委員)

令和4年、ほんとうにいろんな事業がなされていて、with コロナでいろいろ復活してきているんだなと思いました。また、令和5年度の事業もたくさんあって、私も参加したいと思う講座もありました。また、開会前に、机に置いてあったチラシもカラフルでデザイン性があって、参加してみたいかなよねと女性陣で話したんですが、そのあたりも改善されていると思いました。R4年、R5年と、防災講座というのがありますが、私の父の会社がSDGsの登録申請を企画したときに、防災講座は開催していますか？ その予定はありますか？ という項目があったんです。で、そういうことをしなければいけないんだなと意識したんですが、SDGsを申請する企業はすごくたくさんあって、そういったところにアプローチしていかれるといいのではないかと、はあもにいの出番が増えるのではないかと思います。先ほど、宮村委員が言われましたが、男性が平日も週末も仕事でなかなか参加できないというご意見がありましたので、企業のトップにアプローチして、(防災講座のように)会社でこういう企画はどうですか？ と持っていかれると、学びたいという社員は多いと思うので、そういうところに手を差し伸べていかれるといいのかなと思いました。

(小野委員)

with コロナのなかで、対面にオンライン、急な欠席やキャンセルなど、たいへんな運営だったと思いますが、非常にバラエティに富んだ企画がなされていることに改めて感服いたしました。おつかれさまでした。R5年度の活動方針についてですが、さきほど宮村委員が言われたことに、かなりハッとしまして、男女共同参画について関心がある、理解がある人ばかりでは世の中ないわけで、そういうかたにどう見られているのかという視点も、これから理解を深めていくうえで大切なことだなということ、改めて気づかされた気がします。お話を伺いながら私が感じたのは、女性のためにやっているというよりも、社会の歪みや不十分なところは女性にいち早く現れるので、女性の課題はいずれ男性の課題になるかもしれないし、男女問わず国の課題になっていくんじゃないかと、いつも思っています。昔、「生きづらさ」というと、女性の専売特許のようになっていましたけど、いまは若い男性とか、中高年の方でも男性の生きづらさというのをやっとな語れるような時代になっていますので、そういうところを、おそらく、はあもにいがやっている地道な(取り組みの)積み重ねが、気づきにつながるのではないかと、とても期待しています。そして、(はあもにいが対象にする層として)若年層の拡大(の必要性)については先ほどから複数の発言がありましたので、私は、中高年の代表としてというわけではありませんが、ひとつ、ずっと気になっていることがあります。育休の話は、どこも、こういう会合ではテーマになるんですが、セットであるはずの介護休業については、ほとんど話題になることがなくて。私も関心を持って調べたことがあるんですが、すこし前のデータなんですけど、2018年で、男女差はありますが、育休は、女性は82%とって、男性も6%くらい、ま、ぼちぼちですが増えてきている。ただ、その1年前の2017年に介護

休業をとった人は、1.2%しかいないんですね。一方、介護離職は10年間で2倍に増えて、2018年に9万人いる。女性が8割だけれども、生涯未婚率が高いので、いま、男性でも一人で親を見なければいけないので(仕事を)辞める人が、非常に増えているということ、そのデータは表していると思います。みなさん、介護をしながら、9割が制度を利用していない。たとえば、責任ある立場にあるとか、仕事を代わってくれる人がいないとか、収入が減るとか、いろんな事情があるとは思いますが、せつかく国が制度を作っている、それをどう生かすかというのを考えるのも、豊かな社会にするうえでは大切かなと思っていて。子どもを産み育てると、いずれ高齢化社会になり、子どもたちの問題でもありますし、私たちの問題でもありますし、高齢化社会を考えるうえで介護休業にもフォーカスした企画があると、みなさん関心は高いんじゃないかと思います。これだけ、値上げだったり、働き方が厳しいなかで、このあいだの(岸田総理大臣の)育休中のリスクリング(発言)への猛反発ではないですけど、これ以上頑張れというよりも、いまある制度を生かして、無理なく仕事が続けられるワーク・ライフ・バランスが守られる、そういう気づきがあるような企画を、来年度以降考えていただければと思います。

(阪本委員)

配布資料を拝見して、コロナ禍による運営の難しさから、徐々に明るくなってきている雰囲気を感じました。先ほど、第一幼稚園での父子のイベントの話をお聞きして、お父さんは行かなければならない状況を作らなければ来ないんだなと思いました。「50歳からのわたし～自分らしい生き方～」の反響が大きかったということですが、私が所属している世界でも、これくらいの年齢の方は、自分がなにをしたらいいのか、どうしたらいいのか、話し相手がいない、ともだちがなかなかいないというのがあったり、子育てが終わってこれからなにをするの？という不安が起きるらしいんです。同じ目的というか、目的は違っても、友だちをさがす、仲間づくりをしたい女性が多いようです。うちの団体に入会されるのも、そういう仲間作りというのが多いものですから、こういった講座をいくつかされると、変わっていく部分もあるのかなって思いました。メンズカレッジについてですが、メンズカレッジとウイメンズカレッジをなんで分けるんだって、確かにそう思います。メンズカレッジに女性も参加していいですよって言われても、なかなか敷居が高い。名称を変更するとか、講座の看板を変えるとか、そういったことも必要ではないかと思った次第です。

(本田委員)

3点ほどございます。ひとつは、R4年度の報告の中で、はあもにいフェスタ記念講演会のKABAちゃんがお座りになった位置について、不満の声がアンケートにあったということでした。私も当日拝見しましたが、3人の位置について、まったく違和感を感じませんでした。これに限らず、アンケートというのは確かに観客の声ではあるんですけど、それを真摯に受け止めたうえで、あまり過剰に反応しなくてもいいのかなと。あの場で言えば、あの3人の位置というのは、ぜんぜん問題なかったのではないかと思います。これが1点目です。2点目は、R4年度事業で台風の接近によって中止されたものがありましたが、これはR5年度事業で実施されるのか、ということです。3

点目は、企画事業の中で、熊本市の指定事業と自主事業というものがありますが、指定事業の方が割合としては多いんじゃないかと思いますが、これは指定管理費になんらかの形で、いわゆる管理運営の費用とは別に、別途、予算化されているのかどうか、今日は市の方からもいらしますので、金額まではお尋ねしませんけれども、それをお聞きしたいというのが 1 点目で、もう一つは、私は芸術・文化に関する仕事をずっとやってましたけれども、現在は、特にコロナ禍にはいって、文化庁の助成事業がすごく増えたんですね。これも R6 年度くらいからかなり縮小されると思うんですけども、相当な金額が助成金として予算化されております。芸術・文化ですけど、文化庁に限らず、たとえば厚労省も文化事業に活かせるような助成もあつたりします。あるいは、国の外郭団体もそういった助成金を出していたりもしますので、もちろんお金があればそれでいいというわけではないんですが、少しでも事業を拡大しようと、こういった普及啓発を少しでも強化しようということであれば、お金がないとできないこともありますので、そういった点の情報収集とか、そういった公的などころの助成金の活用、場合によっては民間(企業)もやってらっしゃるかもしれないので、是非そのあたりも生かしていただけるといいかなと思っています。

(事務局 田中)

R4 年度に台風の影響で中止になった事業については、はあもにいフェスタで似た内容のものを実施しました。その後も再実施を働きかけたのですが、団体側が活動を継続できなくなって実現しませんでした。R5 年度は新たな企画を募集しているところです。

(熊本市男女共同参画課 山田課長)

先ほどご質問あった市指定事業については、全体の指定管理料のなかに含まれております。それと、さまざまな補助金を使ってはどうかというお話がありましたが、熊本市では内閣府の地方女性活躍交付金を使って、事業を行っています。

(八幡委員)

それと重ねて文化庁の予算をとってくるというのは難しいんですか？

(熊本市男女共同参画課 山田課長)

厚生労働省の DV の補助で事業を行っています。

文化庁の補助は把握しておりません。

(八幡委員)

上天草市で、以前、文化庁が推薦する男女共同参画のイベント、たとえば落語家さんで男女共同参画のおはなしをするなど、この方だったら助成金を付けますよ、的な、ですね、そういうものに参加させていただいたことがあったので、そのようなイメージでお尋ねしたんですが。

(本田委員)

国の助成金が複数、別のところからというのは、もしかしたら難しいかもしれません。

(八幡委員)

そのあたりもご確認いただいて、もし活用できる可能性があれば、そういったところでもチャレンジ

していただくのもひとつの方策かなという(本田委員からの)ご提案だったと思います。

(熊本市男女共同参画課 山田課長)

女性のための交付金の地域女性活躍交付金を活用しておりますが他に補助金があるか調査してみます。ありがとうございます。

(本田委員)

私は簡単に、いろいろ情報収集していただければと言いましたが、事務局の方からすれば日常的にいろんなところからの情報を集めるだけでも、そうとう時間とエネルギーが必要なんですね。ですから、そういう意味でも、さきほど坂口委員がおっしゃっていましたが、連携というのがとても大事で、すべてを事務局がやろうとすると、とてもじゃないですがなかなか前に進みませんので、せっかく今日の審議会の委員のかたにもいろんな分野の方がいらっしゃいますので、そういう方々がキャッチされた情報を事務局にお伝えするのは有効と思いますし、実施に当たっても、ぜんぶ事務局でやるのではなくて、できるだけみなさんの力を借りながらやっていくのがいい方法だと思っています。

(那須委員)

3点ほど、お話します。まず、防災出前講座について。熊本地震のときには、体育館などの避難所ではこういった男女共同参画の視点からの課題も多かったということから、こうした出前講座も始まったと思うんですが、熊本は、各避難所に担当の職員を置くよう調整しているということもありますから、もし過去になさっていないのであれば、そういった避難所担当職員に向けて防災出前講座を実施されるとよいのではないかと思います。それと、気になったのは、(11月のはあもにいフェスタ時の)エレベーターの故障で、定期的にメンテナンスをされているとは思いますが、そういうなかでの故障の原因が、老朽化だったのか何だったのか、原因をしっかりと究明して、館内の設備の安全点検を図っていただきたいというのが、もう1点です。3点目は、やや大きな話になりますが、女性の社会進出を進めるために、一人ひとりのスキルを磨いたり資格をとったりすることで現状を乗り越えていこうという取り組みはこれからも続けていただきたいですが、私は、その根底になにがあるのかということ、直接伝えるのは難しいでしょうが、社会的、政治的關係から自分が置かれている立場に気づいていくということが必要ではないかと思っていて、例えば、男女の賃金格差は日本は国際的にみて遅れていて、他の先進国とは違いますね。なぜ女性がこんなに生きづらい状況になっているのか、その原因を自分の資質や能力に向けるのではなくて、社会や政治に向けるような、そういった気づきが参加者のなかに広がって、社会や政治にもの言うのはなかなか踏み出せない部分もあるでしょうが、私は市議会のなかで、いろんな陳情・請願とか市民から寄せられるんですね。そういう意味では、政治が解決できる部分については、一人ひとりの市民が意見をもって、行政にも意見を言ってアプローチできるような、そういう人を一人でも増やしていく取り組みも必要ではないかと思えます。息の長いテーマで、苦労や工夫も必要と思えますが、そういう視点を今後大事にしていいただければという思いを持っております。

(北村委員)

さきほど坂口委員が言われた、学校との連携に関して、最近思うところがありまして。学校の評議員をしているのですが、一人のお母さまから子どもの性の問題について誰に相談していいか分からないという話を聞きました。私は昨年 11 月はあもにいで行った「子どもに伝える性のはなし」をオンラインで受講していたもので、こういうものがありましたという情報をお伝えしました。こういった企画の開催案内を学校にパンフレットを置かせてもらうとか、青少年健全育成協議会を通じてお知らせするとか、情報の共有というのはいろんな形があっただけいいと思っているので、とりあえずやってみることが必要ではないでしょうか。私が今回、講座を受講したのは、性を自分を大切に思う心を育むために捉えましょうというテーマがあったからです。内容は、文科省が配信している動画素材の内容と重なるものがありました。学ぶところが大きかったので、連携、情報共有は大事だと改めて思いました。

(八幡委員)

では時間も残り少なくなってきましたので、最後に私の方からお話したいと思います。まず、メンズカレッジ、ウイメンズカレッジのあり方に関してなんですが、私自身はこれらのイベントの開設主旨というものも開設時から承知しています。ウイメンズカレッジは、いろいろな審議会に参画する女性が少ないということから、女性の社会参画を促進するという、ひとつのポジティブ・アクションの取り組みとして開設されたと思っております。で、そうした趣旨を大事にしながらも、参加者について、必ずしも女性に限定せずという在り方もありかなと思います。一方、メンズカレッジの方は、参加者が少ないのが非常にもったいないなと思うところで、果たして、男性を引き付けるのに魅力的なプログラムなのかという点が、問われなければいけないのかなと。最近、熊本大学で、職員向けに、ファザリング・ジャパンから育児休業を取られた、公認会計士の資格を持つ男性をお招きして、育児休業の取得のあり方に関するお話を伺ったんですが、男性が聴いても女性が聴いても面白い。ただ単に、育児休業を取得したという経験談にとどまらず、職場がダイバーシティ・マネジメントに舵を切るうえで、育児休業取得というものが如何なる意味を持つのか、というお話をさせていただきました。このダイバーシティ・マネジメントというのは、育児休業のみならず、(R4 年度事業にある)男女共同参画のようなもののみならず、例えば(同じく)SDGs に関しての起業家支援講座なども行われているわけですが、そういう視点で、もう少しプログラムの多様化、あるいは男性向けの導入編としてメンズカレッジを位置づけ、この会館でほかに開設されている、例えばSDGsの起業家支援講座などへ男性に目を向けていただくための、促しの場として位置付けるとか、それはウイメンズカレッジも同様と思うんですが、個々のイベント間を有機的に結びつける取り組みを工夫していただくといいかなと思ったところでした。これが今年度の取り組みに関してですね。来年度の編成方針については、書かれているとおり、男女共同参画センターということですから、女性だけのテコ入れではなく、それが男性にも広がっているということは素晴らしいと思いますし、それが多様性への支援ということで、今後いかに取り組みを拡大していくのかと

ということがひとつの方向性として、検討していただくべきなんだろうと。それから、世代間の広がり、ですね。熊本市もいまや人口減少に直面しており、どの世代が県外に転出しているかという、20代から40代の女性の市外への転出が超過しているという状況があるんだそうです。その20代から40代の女性に、いかにこの熊本市が暮らしやすい街であるべきか、そのためのご意見を上げていただくための、なにか仕掛け作りというの、この会館でやっていただけるといいのかなと思ったりしていますし、それから、子ども・若者を対象とするイベントを中心としつつも、50代対象のイベントが人気だったという報告もありましたから、それらをいかに全世代型の、もちろんメリハリはつけていただいて構わないと思うんですけど、そういうところに拡張していただくこともひとつポイントかなと思っております。あとひとつは、熊本特有の取り組みの充実。熊本地震の経験をこれからいかに残していくかということも、熊本特有の取り組みだとは思いますが、それ以外にも、例えばいろんなイベントの講演者、たとえば今回熊本出身のKABAちゃんに登場していただいて、非常に好評だったと。こういう、熊本に関わりあのある方を適宜取り込んでいただくというの、重要なことではないかと思った次第です。今後の会館のイベントの参考になれば幸いです。

わたくしからは、以上です。ほかの委員の方から追加で意見がありませんか？

(坂口委員)

「50歳からのわたし」はとてもいい企画と思っていて、介護の問題も、介護離職の例を私も見聞きしていますし、私自身も50歳になって介護の問題に直面しているんですが、「50歳からの介護のリアル大学」とかあれば、認知症について学ぶときに、たぶん男性の50歳のかたも、知らないから孤立している方、離職につながりそうな方が多いので、参加されるんじゃないかなと思います。「50歳からのセカンド・キャリア大学」や「働く人のワーク・カレッジ」みたいに、男女別ではなく、年齢や目的別のテーマになると、みなさん勉強したいと参加されるんじゃないかなと思いました。それと、熊本県はマンガ県をテーマにやっていくとも聞いたので、「マンガで考えるジェンダー大学」というのがあれば、年齢問わずいろんな人に、垣根低いところから参加してもらえないんじゃないかなと思いました。

(八幡委員)

では、こうした活発なご意見を、来年度以降の会館の運営に生かしていただくことをお願い申し上げ、審議は終了したといたします。

それでは、今回をもって委員を退任されるかたが3人、私を含めておりますので、ひとことご挨拶をいただいてもいいでしょうか。

(坂口委員)

ずっと長い間、本当にありがとうございました。はあもにいの歩みや活動を勉強させていただくことで、私自身がすごく変わって、息子への声掛けであるとか、出会った子どもたちへの声掛けが、ほんとにそういった視点で日常会話ができるようになったなということに、ほんとに感謝申し上げます。

げます。個人的には今後、ユース世代のユース・センターというのを、居場所作りとして、10代の居場所ということで立ち上げる予定です。また、介護も、身近な問題なので、シニア・カフェということで、高齢者と介護されている方が集まれる場所、そこに子どもたちも関われるような仕組みを作っていけたらなと思っています。国際女性デーの部分で何も活動ができていなかったのも、今年にはホワイト・リボン・ランに手を挙げて、3月5日に白川河川敷を走ります。これは、小学生の親子の参加が多かったので、そういった親子で考えていけるように、毎年のウチのテーマとしてやっていけたらなと思っています。今後も、はあもにいで学んできたことを、ひとつひとつ目の前の子どもたちに対してやっていけたらなと思っていますので、熊本大好きですので、今後ともよろしくお祈りします。

(那須委員)

今期で審議員を退くことになりました。私はこの場において、みなさんの取り組みの姿勢や、さまざまな立場でのご意見を聞きながら、自分自身の認識の甘さであったり、未熟さであったり、そういったものを気づかされ、勉強に本当になった、私自身にとっても有意義な時間でした。小学校の子どもが二人いる父親の立場として、そして市議会議員も今期で退くことになりましたので、第2キャリアをどうするかという、まさにいま課題になっていることについて、はあもにいの取り組みも参考にさせていただきながら、今後頑張っていきたいと思っておりますし、一市民として、この取り組みが、地域や、市内、世間、全国と広がるように、自分自身もまた皆さんに学びながら頑張っていきたいと思っております。ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

(八幡委員)

わたくしは、坂口委員とともに11年間に亘ってこちらの審議会にお世話になりました。発足時は、指定管理が始まるということで、まずはスタッフのみなさまの専門性というところから、勉強していただくというところから始めていただき、それがいまや、この10年の間に、熊本県内ではここがいちばん、男女共同参画の分野では充実したスタッフを抱えていらっしゃるというところまで力をつけていただき、ほんとうに嬉しく思っているところです。そして、この間には、熊本地震、今回のコロナ禍と、たびたびの困難な状況にも直面され、その都度、最善の対応をご検討いただき、ほんとうにきめ細かい会館運営をしていただいたことに、心から敬意を表したいと思っております。課題は、熊本市が非常に大きい都市ですので、たとえば上天草市であれば、どこにどういう人材がいるか直ぐに把握できるんですが、それができていないというところで、数多くの人材をこの熊本市は抱えているんでしょうけれども、そういう方たちをうまく適材適所で、特に女性や多様性という観点で人材を発掘して、よりよい地域の充実というところにつながっていくといいなと。そのひとつの核として、この会館の人のつながりを活かしていけるといいと思います。まあ、委員が代わることによって新しい、特に若い感性をこの会館の運営に活かしていただければなど。そういうことで、ますます新しい可能性を開いていただきますことをお祈りして、退任の挨拶とさせていただきます。ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

閉会